

外国籍児童生徒への教科・母語・日本語相互育成学習

事業責任者： 半原 芳子（教育学研究科・特命助教）

代表学生： 片川 絵里奈（教育地域科学部・3年）

概 要	
	<p>本事業は、グローバル化の進行に伴い近年急増している福井市内の公立小・中学校の外国籍児童生徒への学習支援を目的とするものである。具体的には、日本語初期指導が終了した外国籍児童生徒に対し、子どもの母語と日本語で教科学習を行う支援を、福井大学の教員・留学生（子どもと母語を同じくする留学生）・日本人学生がチームを組み行う。本支援の特徴は、日本語支援だけではなく子どもの母語を保持・育成することを視野に入れていること、そのため子どもの母語を持つ留学生と日本人学生が協働で支援を行っていることにある。5年計画で2年目となった今年度は、地域貢献事業支援金による助成のもと15名の福井大学の学生が二つの公立小・中学校での通年支援の実施をはじめ、ふくい市民国際交流協会主催の公民館での放課後支援教室、さらには福井県国際交流協会とふくい市民国際交流協会の共催による市内の外国籍児童生徒を対象とした夏休み・冬休み宿題教室への参加を行った。</p>
関連キーワード	多言語多文化共生、日本人学生と留学生の協働、学校と地域と大学の連携

事業の背景および目的

近年、福井市内の外国籍児童生徒は増加の一途を辿り、平成26年度の調査時点において、小学校に78名、中学校に40名の子どもが在籍している状況にある。外国籍児童生徒は来日に伴い、それまで母語・母文化で培ってきたものから断ち切れ母語の民族的活力が弱い社会および学校に入っていくことにより、認知的な発達の中断やアイデンティティー・情意面の不安定、また母語と日本語の二言語不十分といった問題に直面する恐れがある。現在、福井市は、公益社団法人ふくい市民国際交流協会が福井市教育委員会の委託を受け、外国籍児童生徒への日本語初期指導を行っている。しかし、初期指導期間終了後は現場の教員が手探りで対応に苦慮している実態があることから、外国籍児童生徒に対する継続的なサポートが課題となっている。

本事業は、日本語初期指導が終了した福井市内の公立小・中学校に在籍する外国籍児童生徒に対し、子どもの母語と日本語で教科学習を行う支援を、福井大学の教員・留学生（子どもと母語を同じくする留学生）・日本人学生がチームを組み行うものである。本支援によって、外国籍児童生徒の認知面・情意面の継続的な発達が保障されるとともに、学校および地域との連携の発展、日本人学生と留学生の協働する力・実践する力の育成、さらには、外国人を含めた全ての住民が既存能力を最大限に発揮できる多言語多文化共生社会の構築の素地がつけられると考えている。

事業の内容および成果

5年計画で2年目となった今年度は地域貢献事業支援金による助成のもと、①市内の二つの公立小・中学校での通年支援の実施、②ふくい市民国際交流協会主催の複数の公民館での「日本語サポートクラス」への参加、③福井県国際交流協会とふくい市民国際交流協会の共催による市内の外国籍児童生徒を対象とした「日本語サポートクラス（夏休み・冬休み宿題教室）」への参加を行った。①の学校での通年支援は、時間割の中での支援（取り出し支援）と放課後支援の二つがある。福井市A小学校ではフィリピンにルーツを持つ小2の児童に週に1回の取り出し支援（国語・算数）を、中国出身の小3の児童に週に1回の放課後支援（国語）を行った。福井市B中学校では、フィリピン出身の生徒に週に1～2回の取り出し支援（数学・理科）を、フィリピン出身の生徒ならびに日系ブラジル人の生徒に週に1回の放課後支援（数学・英語・理科）を行った。①～③の支援はいずれも学校や地域の方との連携・協力の上で進められた。したがって外国籍児童生徒のより良い学習および学校と地域と大学の連携の発展に寄与できたと考えている。

教育地域科学部および工学部の学生（学部1年生から博士後期課程2年生まで）のあわせて15名の学生が今年度の支援に参加した。留学生の国籍もフィリピン、中国、エジプトと多岐に渡った。支援を通じ学生は他者と協働する力を育むとともに、自ら主体的に課題を見つけ探究する力を培っていく様子がうかがえた。具体的には、来年度福井県の教員になる教育地域科学部の学生はすべての子どもの多様性を保障する教育のあり方を、県内の企業に就職する工学部の学生は企業の地域貢献のあり方を模索していった。また、来年度ドイツに留学する予定の教育地域科学部の学生は、移民受け入れの最前線であるドイツで移民の子ども達の教育がどのように行われているかを滞在時の研究課題にしたいとしている。こうした学生の成長も本事業の大きな成果だと言えよう。

参考文献・添付資料および特記事項等

本事業はA小学校およびB中学校の先生方、公民館や「日本語サポートクラス」で学生と共に活動をしてくださっている地域の方々、ふくい市民国際交流協会の辻端聡子さん、福井県国際交流協会の島田しのぶさんから多大な理解と協力をいただいている。

事業名称:外国籍児童生徒への教科・母語・日本語相互育成学習

事業責任者：半原芳子（教育学研究科・特命助教） 代表学生：片川絵里奈（教育地域科学部・3年）

キーワード：多言語多文化共生 ・ 日本人学生と留学生の協働 ・ 学校と地域と大学の連携

福井市内の公立小・中学校に在籍する外国籍児童生徒に、福井大学の教員・日本人学生・留学生がチームを組み、子どもの母語と日本語で教科学習支援を行う

背景

- グローバル化に伴う外国籍児童生徒の増加（H26調査 福井市内 小78名 / 中40名）
- 現場は対応に苦慮
⇒日本語初期指導期間終了後の子ども達への継続的なサポートが課題

特徴(内容)

- 日本語だけではなく、子どもの母語も大事に育てながら教科の学習を行う
※本年度は国語・算数(数学)・理科・英語を実施
- 日本人学生と留学生が協働探究する
※15名の学生が参加
留学生の国籍はフィリピン・中国等

公民館・国際交流協会施設

公立の小・中学校



成果

- ①市内の二つの公立小・中学校での通年支援の実施
- ②ふくい市民国際交流協会主催の複数の公民館での「日本語サポートクラス」への参加
- ③ふくい市民国際交流協会・福井県国際交流協会の共催による市内の外国籍児童生徒を対象とした夏休み・冬休み宿題教室への参加
→ 外国籍児童生徒のより良い学習および学校と地域と大学の連携の発展に寄与